



今年の『ダンボールめいろ』では、昨年度大人気だった巨大がくどろが迷路の入口に構え、多くの子どもたちを迎えました。二日間、総勢二九六名の子もたちが迷路に挑戦してくれました！迷路

市民フェスティバルに参加



内には仮装したぐくどろや宝箱が隠れていて、ゴールを目指すだけではなく、ぐくどろ探しにも夢中になる姿がたくさんあり、ワクワクしている子どもたちの笑顔で溢れていました。

毎年恒例の『ベーゴマ教室』『ベーゴマ大会』。この時期になるとこの大会を目標に学童クラブでも大盛り上がるのベーゴマ。学童クラブ内外から百二名のエントリーがありました。



決勝戦の様子

た。その中の頂点に立ったのが、大場翔介さん（中学二年生）、二位中川結陽さん（小学二年生）、三位蟹谷太晴さん（小学三年生）おめでとございます！

一勝を勝ち取った時のガッツポーズ、悔しさから流れる涙、仲間への熱い応援の声、その場にいたみんながそれぞれの想いを持ってベーゴマ大会に参加してくれました。



THE TOP SEASON IN JAPAN

ベーゴマ 知ってる？
回せねえだろ！？

ベーゴマは、日本発祥の独楽（こま）。

起源は平安時代に京都の周辺で、バイ貝の殻に砂や粘土を詰めてひもで回したのが始まりといわれている。関西から関東に伝わった際に「バイゴマ」が訛って「ベーゴマ」となったと言われる。云々…（ウィキペディアより）

しかし、調べてみると奥が深いベーゴマ。（もっと見たい人このQRコードから←）
かつて、日本で唯一のベーゴマ工場

「日三製造所」に「ベーゴマ作りをやめないで！」と小手指学童クラブと富岡学童クラブの子もたちで嘆願に行ったことがある。で、

今もベーゴマを専門に生産が続いていることは、所沢の学童クラブとしてちょっと誇らしい。当時、小手指学童クラブの指導員だった「コバン」こと小林富雄さんの「バイゴマ」もご覧ください。（コバンのバイゴマ←）



ベーゴマの取り組み

三ヶ島学童

夏休み、四年生以上の子どもたちがベーゴマを始めたところ、低学年の子どもたちに「面白そう。回してみたい!」という気持ちが生まれ、一生懸命練習する子が現れました。

保護者の方から「ベーゴマの床(ところ)はどうやって作るのですか?」と聞かれることも。秋以降、子どもたちの中でのベーゴマ人気がさらに盛り上がりつつあります。強くするために削りはかな

ひだまりみなみ

夏休みからベーゴマが流行り始めました。

ひだまりみなみでは、初めて床の上で十秒間回せるようになった子には、ベーゴマをプレゼントしています。在籍四十一名のクラブの中で、夏休みの間になんと新しく十六名の子が回せるようになりました!自分のベーゴマをもらった後は、色塗りや削りといった加工にも苦戦しながらも挑戦しています。

夏休み後には、少し下火気味だったベーゴマも、市民フェスティバルやクラブ内ベーゴマ大会が続ぎ、再び盛り上がりを見せています。その後も続々と回せるようになった子



り真剣に取り組んでいます。低学年の子どもたちも「格好いい!」

やってみたい」と挑戦します。ベーゴマの個性をだすため

が増え、毎日下校してすぐに元氣な「ちっちのち!」の声が聞こえ、指導員も負けてしまっただけで日々上達している子どもたち。普段は一緒に遊ばない子ともベーゴマ遊びを通して男女、学年関係なく遊ぶ姿もあり、今ではクラブに欠かせない遊びの一つになっています。



に、ボス力での色塗りにもそれぞれこだわりがでています。高学年の子たちの影響力はすごいです。

並木学童

並木学童では、ベーゴマを始めるきっかけ作りと、自分のベーゴマがほしい!という子ども達の声に答え、ベーゴマチャレンジを行っています。

- ①初心者：二十秒
- ②上級者：一分二十秒
- ③達人：二分

自分で巻いて床の上でこの秒数を回せたらベーゴマGETです。練習と挑戦を重ね、初めてベーゴマをGETした子ども達の、嬉しそうな顔!そして上級者ともなると、さらなる上を目指し加工の道へ。そんな高学年の姿が低学年の子ども達の憧れの的となっています。

そしてやっぱり対戦が楽しいのがベーゴマ。「大会がしたい!」と、『並木学童ベーゴマ杯』



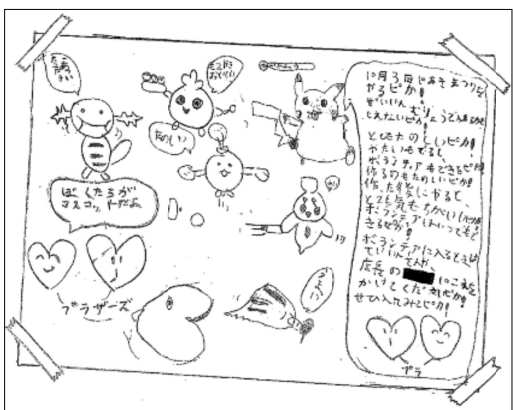
を四年生男子が企画。緊張の中、練習の成果を発揮した子もいれば、床になかなか入らない子も。「嬉しい!」「悔しい!」「がんばれ!」「大丈夫!」...みんなの思いが溢れた素敵な大会となりました。ベーゴマを通して子ども達の関係がぐっと深まりました。今日もまた「ちっちのち!」の音が響きます。並木学童のベーゴマ熱はまだまだ熱いです!



保育エピソード 宮前学童

五月。大量に貰ったヤクルトのボトルで四年生男子が提灯を作り、突然始まった「ヤクルト祭り」。これが子どもたちに大ヒット。これにインスピレーションを得た二年生。

「春祭り」の開催ポスターを



壁に掲示し、試行錯誤の上、無事開催。手探りでのレストランでした。

七月。気付くと今度は「夏祭り」の開催ポスターが。バイジョンアップした夏祭りでは金魚すくい、輪投げ、指人形が並び、折り紙で作ったお金も配布されました（四百円玉等もあつて可愛かったです）。

そして十月。期待通りに「秋祭り」のポスターと、今回は人員募集のポスターが。チケット制に進化し、焼きそばやお好み焼き等、個々のパッケージにも拘って迎えたお祭り当日。準備に参加していなかった子が急にお店をやりたいと言っても「じゃあ、これお願い」と言っただけ振り分けてくれます。

せる事。そして、仲間に入りたい子を全員受け入れてくれる事。今度は何を企画してくれるのか楽しみです。

シリーズ前ちゃんの現地リポート④



今回は三ヶ島学童クラブの様子です。

広々原っぱ！

初めて三ヶ島学童クラブに伺ったのは昨年の秋。学童施設前にある庭もドッジボールや一輪車

ができるほど広いのですが、その数倍の広さの原っぱが一面広がり、子ども達は野球、サッカー、おままごと、基地ごっこ、虫取り、植物育て等々、思い思いに楽しく駆け回っている姿がとても印象的でした。

一年振りの原っぱは、



一面に秋の草が生い茂り、緑の草原の中、黄色のセイタカアワダチソウの群生がこちらこちらに目立っていました。これでは遊べないのでは？というのはリポーターの浅はかな発想。子ども達は草の迷路のような原っぱにどんどん入り、雑草の種が体にくっつくのも何のその、原っぱ遊びを楽しんでいました。どんな環境でも遊びを見つかる子ども達の逞しさに感動しました。

毛糸を使った工作

マフラーの仕上げにボンボンを作っている三年生。その周辺にボンボン人形を作りたいと一年生の子も達も集まってきました。ボンボンメーカーを使って毛糸を巻くところまでが第一段階。中央をタコ糸で結ぶ結ぶ第二段階は学年によって力の差があり、思いがけず残念なことが起きることもあります。やり直しがき

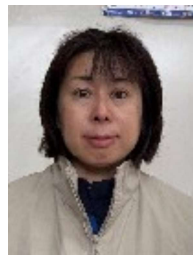
くのもボンボン手芸の魅力かも。最終段階は、上手にできたボンボンにフェルトを使っで、立体的に耳や目をつけるのですが、一年生には難しい作業。「やって」と大人に援助を求める子、自分で頑張る子、様々でした。思い描いた通りにできなくて悔し涙を流しながらも、一緒に最後までやりきった子のスッキリした表情は、リポーターへの今日一番のご褒美と感じられました。

※今回三ヶ島学童クラブ取材させていただき、環境視点の一つとして「工作、手芸用品等の管理」の良さを改めて実感しました。とても使いやすく、尚且つ片付けやすいという点に感心しました。



この人 地区長紹介

地区長は、四つの地区ごとに保育の交流や情報交換を行っていく取りまとめを行ったり、職員との相談役としても活躍しています。



北田 貴子 指導員

西地区 地区長

三ヶ島学童クラブ

西地区は自然豊かな環境のクラブが多いからか、おおらかな特性の地区だと思えます。指導員は仕事に真摯に向き合っている人が多いです。困ったときは助け合い、クラブの悩み事も、率直にさらけ

出しています。

地区長で良かったと思うことは、みんなに西地区の良いところを自分のこのように自慢できること。大変なことは、西地区のみんなの気持ちを正確に伝えられているのか、いつも悩みます。

地区長として意識していることは、「この人になら話しても良いかも」と思ってもらえる、信頼してもらえ人間でいることです。それぞれのクラブでカラーや状況は違うけれど、尊重しつつも助け合える地区に行きたいと考えています。みんな指導員のプロなので、お互いの良いところを参考にさせてもらいます。一方「それは違うと思う」など課題等は指摘し、より良い方向に一緒に考えていける指導員集団です。

指導員になって良かったことは、毎日、子どもたちのおかげで、色々な驚きや、楽しさや、子どもがわい顔をいっぱい見られることです。最近特に嬉しかったのは、大学生になったOBの子もたちが学童クラブでアルバイトしてくれていることです。そしてみんなこの仕事を「楽しい!」と言ってくれています。

クラブでは子どもに「たかちゃん」と呼ばれています。怖いけど、ボケボケしている人と思われているのではないのでしょうか。指導員として、言葉は大事にしています。素敵なことや感謝の言葉はタイミングを逃さず意識して伝えるようにしています。

フライベートでは、ここ数年さくくもも子さんが好きで、企画展などに足を運ぶことが多いです。身の回りの物も気が付くとコジコジや、ちびまる子ちゃんだらけになっています。

な驚きや、楽しさや、子どもがわい顔をいっぱい見られることです。最近特に嬉しかったのは、大学生になったOBの子もたちが学童クラブでアルバイトしてくれていることです。そしてみんなこの仕事を「楽しい!」と言ってくれています。

次はこの人



二〇二三年も残りわずかとなりました。

五月に制限が解除され徐々にコロナ禍前の生活に戻りはじめた一年でした。

今号はまだまだですが、私の勤務する三ヶ島学童クラブのことがいくつも載っていて、かわいい子どもたちの様子を紹介できて嬉しいです。

今年の秋は原っぱで柿と栗が収穫できていました。三ヶ島学童の庭から子どもたちとよく空を見あげています。

「あの雲は鳥みたいだね」と雲観察をすることも。日々子ども達にたくさんのお話を教えてもらいながら過ごす毎日です。

今回特集されているベーゴマの回し方も子どもたちに教えてもらったなと一人で思い出に浸ってしまいました。ベーゴマの回し方を教えてもらってから早二十年たつのに一向に強くなりません(汗)子どもたちは短い期間でどんどん上手になっていくので尊敬がありません。

(北田)

編集後記

